

Title	泣く昔男 : 『伊勢物語』の物語構成
Author(s)	木下, 美佳
Citation	詞林. 2004, 36, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67523
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

泣く昔男

――『伊勢物語』の物語構成―

はじめに

『伊勢物語』には『古今集』と同一の歌が見られる章段がに、『伊勢物語』には『古今集』とではその解釈に違いが生じている。その理由の言味を本来の成立事情がら意図的に切り離すことによって、言味を本来の成立事情から意図的に切り離すことによって、中内容をその歌の表現の中に見出し、逆にそれにあわせて、味内容をその歌の表現の中に見出し、逆にそれにあわせて、味内容をその歌の表現の中に見出し、逆にそれにあわせて、味内容をその歌の表現の中に見出し、逆にそれにあわせて、味内容をその歌の表現の中に見出し、逆にそれにあわせて、本来の意味とはかならずしも同一ではない、もうひとつの意意味を本来の成立事情がら意図的に切り離すことによっている。その理由の当が見られる章段が終った。「伊勢物語」には『古今集』と同一の歌が見られる章段がという。

考察がなされている。稿者はそれに加えて、その詠作事情が「新しい架空の詠作事情」の幾つかは山本氏の論考により

御髪おろし給うてけり。正月に拝みたてまつらむとて、かくしつつまうで仕うまつりけるを、①思ひのほかに、

木下 美佳

『伊勢物語』の創作意図を考察していくこととする。上のような視点から「泣く」という語を手がかりとして、語としての在り方を考えるのに有効であろう。本稿では、以

考える。統一的な物語構成を探る作業は、『伊勢物語』の物ある統一的な構造をもって創出されている点が重要であると

一 泣いて帰る姿―八十三段から―

ように続く。 八十三段は、惟喬親王が登場する章段の一つである。 八十三段は、惟喬親王が登場する章段の一つである。 八十三段は、惟喬親王が登場する章段の一つである。

たかし。 小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いと しひて御室にまうでて拝みたてまつるに、 A つ

れづれと、いとものがなしくておはしましければ、やや

ければ、えさぶらはで、B夕暮にかへるとて、 り。②さてもさぶらひてしがなと思へど、公事どもあり 久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひ出で聞えけ

見むとは 忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を

とてなむ泣く泣く来にける。

られる。ここで詠まれる歌は『古今集』では次のようにある。 激しく泣く昔男の姿は二重傍線部で示したように末尾に見

惟喬のみこのもとにまかりかよひけるを、かしらお

とてまかりたりけるに、ひえの山のふもとなりけれ たりてをがみけるにAつれづれとしていと物がなし ば雪いとふかかりけり、しひてかのむろにまかりい ろしてをのといふ所に侍りけるに正月にとぶらはむ

くてBかへりまうできてよみておくりける なりひらの朝臣

悲しみを伝える点ではほぼ同じ展開を辿るが、傍線部Aの 双方ともに惟喬親王の出家と、それに接した昔男・業平の :すれては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見 (巻十八・雑下・九七〇)

「つれづれといとものがなし」い主体と、傍線部Bに示され

ある。また、傍線部Bの違いは、片桐洋一氏が「なお、『伊 れば詠者である業平となるが、『伊勢物語』では惟喬親王で がなし」い様子でいるのは、和歌の詞書ということを踏まえ る歌を詠む場面に違いが見られる。『古今集』のAで「もの

勢物語』ではそのような状況に堪え切れなくなった業平が帰 む場面の設定自体の違いであり、物語展開にも少なからぬ差 いるのに注意しておきたい。」と述べられたように、歌を詠 あるが、『古今集』では帰ってから詠んで送った歌となって るにあたって詠んだ歌とされていて、場面的な盛り上がりが

語」である。中心である和歌へ向けて物語が展開するのは当 い①や②のような、心情を吐露する語を交えながら語られ 然であり、また、「物語」であるからこそ『古今集』にはな

違を与えている。言うまでもないが、『伊勢物語』は「歌物

いることも納得できよう。

部①に関して、竹岡正夫氏が「(前略) 二人の人間的つなが 思いを歌に詠み、そして泣いて帰る構成をとっている。破線 八十三段は、惟喬親王と過ごした時を回想し、その懐旧の

である。」と説かれたように、前半部と後半部の対比、破線の馬の頭の衝撃と切ない心情とをここで十分味わえばよいの りがここで急に断ち切られたのである。私たちはそういう時

『伊勢物語』では歌に付随して、最後に二重傍線に示される 悲しみを十分に伝えられたはずである。だとすれば、 部①に示された男の心情だけで、「物語」として出家の際の

2

趣旨の内容を持つ章段を順次考察していくこととする。 は全く描かれていない。このことを考えるために、以下、 「かれねばならないのか。この場面は『古今集』に

同

泣いて帰る姿―四段から―

した歌を詠み、さらに泣きながら帰る姿で閉じられた章段と 八十三段同様に過ぎ去った世界を懐古し、その懐旧に根ざ

四段が挙げられる。 むかし、ひむがしの五條に、大后の宮おはしましける、

ろざし深かりける人、ゆきとぶらひけるを、正月の十日 西の対に住む人ありけり。それを、本意にはあらでここ

けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、①なほばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞 見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばら ざかりに、去年を恋ひていきて、②立ちて見、居て見、 憂しと思ひつつなむありける。又の年の正月に、梅の花

なる板敷に、月のかたぶくまでふせりて、③去年を思ひ でてよめる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはも

との身にして

けり。 とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣くかへりに

ここで詠まれた歌は『古今集』では次のようにある。

たいにいきて月のかたぶくまであばらなるいたじき 月のおもしろかりける夜、こぞをこひてかのにしの どえ物もいはで、又のとしのはるむめの花さかりに まりになむほかへかくれにける、あり所はききけれ にはあらでものいひわたりけるを、む月のとをかあ 五条のきさいの宮のにしのたいにすみける人にほ

双方ともに、女と逢っていた去年の戻らないことを悲しむ して 月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身に (巻十五・恋五・七四七)

にふせりてよめる

在原業平朝臣

男の姿が語られる点では共通する。しかし、四段は昔男の悲 しみを描く物語となっているので、傍線部①に示されるよう

泣く姿で閉じる語り方は、八十三段において、親王と過ごし た過去を懐古し、その過去はもう戻らないと悲しみながら帰

描写が多いことに気付く。そして、過去を回想する歌を詠み、

に男の心情吐露が交えられ、また、そのような心情を伝える

る昔男の姿を描く語りと同種のものである。この同種の悲し でに一度泣いていることを見逃してはならないだろう。単純 みを描く四段において、段末の「泣く泣く」の前に、男はす

ず、さらに「去年を思ひいで(③)」させ、歌を詠み「泣く 「うち泣」く姿で示されていると言えよう。それにも関わら あらず(②)」と去年と今との違いを目の当たりにした時の に、戻らない過去を悲しむ姿であれば、「去年に似るべくも

段を閉じようとする、『伊勢物語』の意図が感じられる。泣く」帰る姿が描かれているのである。ここには泣く姿で章

はなかろうか。
る物語のスタイルは、『伊勢物語』の作られ方と言えるのでであると言えよう。このような、泣く姿によって章段を閉じを描く八十三段、四段の語り方は、ともに相通ずる語りくちを描く八十三段、四段の語り方は、ともに相通ずる語りくち過去を懐古する歌、その歌の後に「泣く泣く」帰る男の姿

三 泣きながら歌を詠む―六十九段・八十四段から―

たに挙げた八十三段、四段と同様の物語構成であると考えられよう。以下、考察していくこととする。 いれるものの、この三章段は泣きながら詠む歌で場面が閉じられるものの、この三章段は泣きながらではあるが、懐旧に根ざこの二章段のみである。「泣く」という語の位置に違いが見した歌を詠む章段として、他に、六段、六十九段、八十四段とれるものの、この三章段は泣きながら高が置かれているのは、なっていた。歌の後に泣く姿で章段が閉じられる物語構成とを歌に詠み、その後に泣く姿で章段が閉じられる物語構成とられよう。以下、考察していくこととする。

段、八十四段から見ていくこととする。 されてきる、六十九年まず、『古今集』を通じて考察することができる、六十九

さめてか

ければ、外のかたを見出して臥せるに、月のおぼろなるばかりに、男のもとに来たりけり。男はた、寝られざり……女の閨近くありければ、女、人をしづめて、子一つ

言葉はなくて、言葉はなくて、場が寝る所に率ていりて、子一つより丑三つまであて、我が寝る所に率ていりて、子一つより丑三つまであて、我が寝る所に率ていりて、子一つより丑三つまであて、我が寝る所に率ていりて、子一つより丑三つまであて、我が寝る所に率ていりて、子一つより丑三つまであ

?、いといたう泣きてよめる。 おや来し我や行きけむおもほえず夢かうつつか寝て

定めよかきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひ

とよみてやりて、狩に出でぬ。

きみやこし我や行きけむおもほえず夢かうつつかねてからなったりける。こせたりけるかけるあひだに、女のもとよりおすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりお業平朝臣の伊勢のくににまかりたりける時、斎宮なここに見られる贈答歌は、『古今集』では次のようにある。

よ (巻十三・恋三・六四五・六四六)かきくらす心のやみに迷ひにき夢うつつとは世人さだめ 返し

勢物語』の意図が六十九段においても確認できよう。 詳細を語るのではなく、泣く場面へと収斂しようとする『伊 部で示される泣く姿は『古今集』には見られない。出来事の 姿へと場面を収束させようとしていることである。二重傍線 という出来事よりも、女との贈答歌、それに伴う昔男の泣く こで確認したいのは、『伊勢物語』が「伊勢の斎宮との逢瀬」 解釈できるのではなかろうか。泣く理由はともかくとし、こ 昨夜の事に対して曖昧であることが詠まれており、男の心細 女から歌が届けられた。女の「君やこし」の歌は、女自身も と指摘された通りである。そのような心情でいる男のもとに、 みずからの心中においてさえ希薄になってゆくのである。」 ねばならぬ自分に気づけば気づくだけ、その逢瀬の現実性は 氏が「翌朝になって、官人としての現実にいやおうなく戻ら 時が男にとって不確かなものへと変わったことは、片桐洋 『古今集』にはない男の心情吐露が立て続けに交えられてい る手段を失った男は、絶望感を味わい、激しく泣いていると さに追い打ちをかける内容であった。昨晩の出来事を確認す る。このような男の心情描写があることにより、斎宮との一 かなしくて」「いぶかしけれど」「いと心もとなくて」と、 段である。『伊勢物語』では、傍線部で示したように、「いと さらに、八十四段でもそのことは確認できる。 六十九段は「狩の使」として『伊勢物語』の中核をなす章 むかし、男ありけり。身はいやしながら、母なむ宮な

> 御ふみあり。おどろきて見れば、歌あり。 給ひけり。さるに、十二月ばかりに、とみのこととて、 まうでず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえ りける。その母、長岡といふところに住み給ひけり。子

くほしき君かな 老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見ま

かの子、いたううち泣きてよめる。 世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人

『古今集』では次のようにある。

の子のため

ことばはなくてありけるうた みの事とてふみをもてまうできたり、あけて見れば りければ、しはすばかりにははのみこのもとよりと りひら宮づかへすとて時時もえまかりとぶらはず侍 業平朝臣のははのみこ長岡にすみ侍りける時に、な (よみ人しらず)

八十四段においても、「まうづとしけれど」「ひとつ子にさ

へありければ」という、簡単ではあるが、状況説明を交える

世中にさらぬ別のなくもがな干世もとなげく人のこのた 老いぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほし 〔巻十七・雑上・九〇〇・九〇一〕 なりひらの朝臣

のような詠歌に付随した昔男の泣く姿で章段を閉じようとす九段と同様であると指摘できよう。八十四段においても、それている展開は、描かれている出来事は異なるものの、六十贈答歌において、相手の歌をきっかけとして泣く場面が描か贈答歌において、相手の歌をきっかけとして泣く場面が描から。ここで確認しておきたいのは、男が泣いたのは、死をことによって、哀れみを深めた物語世界が展開されることとことによって、哀れみを深めた物語世界が展開されることと

いだろうか。

いだろうか。

の意図によるものだと言えるのではないだろうか。

の意図によるものだと言えるのではないのである。この点からも昔男の泣く姿が見らも『古今集』の詞書全体を見渡しても、実は「泣く」というも『古今集』の詞書全体を見渡しても、実は「泣く」という以上、『古今集』にはみられないが、『伊勢物語』には激し以上、『古今集』にはみられないが、『伊勢物語』には激し

る『伊勢物語』の作られ方が確認できる。

らる。語を進め、最後に激しく泣く男の姿へと収斂されていくので潔ではあるものの、男の心情吐露や状況説明を交えながら物別、男の悲しみを伝えようという意図があり、その為に、簡物語である『伊勢物語』は、歌集である『古今集』と異な

四 歌を詠む前に泣く―六段から―

六段を見てみることとする。(望らに『伊勢物語』の虚構の作り方が端的に示されている)

今西祐一郎氏が「六段の核心は「鬼はや一口に食ひてけ

をして泣けどもかひなし。として立けどもかひなし。として立けどもかひなし。。 女のえ得まじかりけるを、年をして立けどもかひなし。 女のえ得まじかりけるを、年をして立けどもかひなし。

しものを白玉か何ぞと人の問ひしとき露とこたへて消えなま

しける時とや。
しける時とや。
しける時とや。

れた通り、六段でも悲しむ昔男の話が書かれている。ここでた男の哀しみを描いている点にあるのではないか」と指摘さり」といった伝奇性にあるのではなく、(中略)女を亡くし

また、激しく泣く姿によって場面を閉じるように構成されている章段において、その悲しみをより際だたせるからこそ、照らし出していることを確認できよう。男の悲しみを描いての「足ずりをして泣」く行為も、悲しむ男の姿をより鮮明に

られるが、泣いているのは連れ去られた女である。解説部分所謂後人注といわれる解説部分にも「泣く」という語は見取れるのである。

う。 においても、泣く姿で物語が収束する物語構成が確認できよ語りだそうとする方が事実よりも重要だったのである。ここは男の泣く姿に収斂させる物語構成によって、男の悲しみを説部分で女が泣いたことを示しておきながらも、物語部分で

五 八十三段後半部の再検討

昔男の泣く姿で章段を閉じる物語構成により、『伊勢物語』

八十三段後半部を詳細に鑑賞してみたい。ことを見てきた。このような理解を踏まえた上で、もう一度は昔男の大きな悲しみを語り出そうとする方法を採っている

かくしつつまうで仕うまつりけるを、①思ひのほかに、かくしつつまうで仕うまつりけるを、①思ひのほかに、如髪おろし給うてけり。正月に拝みたてまつらむとて、れづれと、いとものがなしくておはしましければ、ややれづれと、いとものがなしくておはしましければ、ややれづれと、いとものがなしくておはしましければ、ややれづれと、いとものがなしくておはしましければ、ややれが、えさぶらはで、夕暮にかへるとて、かくしつつまうで仕うまつりけるを、①思ひのほかに、かくしつつまうで仕うまつりけるを、①思ひのほかに、かくしつつまうで仕うまつりけるを、①思ひのほかに、かくしつつまうで仕うまつりけるを、①思ひのほかに、

④忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君

りはない。②の「ものがなし」い主体も親王であり、昔男のい知ることが出来る。しかし、この衝撃を引きずるような語事であることを思えば、その衝撃が大きいものであったと伺れているが(①)、親王と昔男の二人の関係が一変する出来

惟喬親王の出家に際しての昔男の衝撃は一語で簡単に語ら

とてなむ泣く泣く来にける。

事ども」があるので叶わないことであった。ここでは、常に「さぶらひてしがな」で吐露されるのであるが、それは「公子を目にし、昔のことなどを思い出して語り合った時に、③様子は描かれていない。昔男の心情は、②のような親王の様

過去を回想する昔男が描かれている。

そして、出家前の親王との交流への懐古に根ざした「忘れての心情により、過去を強く回想する人物として再設定される。(ので示された出家への衝撃と、それでも仕えたいという②)

一首において場面は最高潮の盛り上がりを見せる。その場面は夢かとぞ思ふ」の歌も、強い懐旧の念の表れとなり、このは

のである。回想しても、その過去は戻らない悲しみが描き出されているに付随して「泣く」という語が位置することによって、強く

に過去を強く回想する姿を描き出し、最後に泣く場面で閉じなくとも、要所で昔男の心情吐露を交えることにより、さら常に悲しみ続ける昔男を描いたりするのではなく、言葉は少みを描いてはいるが、その悲しみの対象を細かに語ったり、つまり、八十三段では、親王の出家に際しての昔男の悲し

段は、泣き方の表現、「泣く」という語の配置に統一が見ら方は、『伊勢物語』の特徴であり、昔男の泣く姿で閉じる章を描く形で展開していたのである。こうした物語構成の在りることによって、懐旧しても戻らない過去を悲しむ昔男の姿

は「昔男の切なる心の表れ」と言われるようなものではなく、家を悲しむ姿として全体を貫くものであった。しかし、それ、この八三段にあって、泣く場面とは、たしかに、親王の出

に気づかされるのである。

れるものではなかったが、その位置付けは一様であったこと

の物語構成であったのである。むしろ、泣く姿へ物語を収斂させるという『伊勢物語』

おわりに

を提示してきた。を提示してきた。によって、この物語の新たな構造を見定めつつ、「泣く姿」によって、この物語の新たな構造か、また、個々の章段の主題とどのように関わってくるのか見ることにより、その姿がどのような機能を果たしているの以上、『伊勢物語』に描かれた激しく泣く昔男の姿を辿り

悲しむ昔男の姿は、「泣く」という姿によって閉じられると中核をなす章段であった。さまざまに過去を懐旧し、激しくように、本稿で取り上げた章段は、いずれも『伊勢物語』の世界への回想・懐古を軸にしてかかれている」と指摘された「桐氏が「『伊勢物語』の中核をなす章段が、過ぎ去った「桐氏が「『伊勢物語』の中核をなす章段が、過ぎ去った

れよう。 方法によって、新しい架空の詠作事情を作り上げたと考えら昔男に重点を置いており、泣く姿へと物語を収斂させていく 男の悲しみの対象を細かに語ることよりも激しく泣き悲しむいう共通の物語構成を持っているのである。『伊勢物語』は、

語論(文体・主題・享受』笠間書院・二〇〇一年)七〇頁。(1)山本登朗氏「和歌の解釈と物語―伊勢物語の方法―」(『伊勢物注

— 8 -

(2)前掲(1)参照。

ることとしたい。 本稿では激しく泣く姿で閉じられている章段に限定し考察を加え本稿では激しく泣く姿で閉じられている章段に限定し考察を加えた段・二十一段・六十九段・八十三段・八十四段に見られるが、(3)『伊勢物語』全百二十五段中、激しく泣く昔男の姿は、四段・

下の理由により親王だと説かれている。(4)片桐洋一氏は、『古今集』での「いとものかなし」い主体を以

『伊勢物語』(定家本)第八三段では「つれづれといと物かなしくておはしましければ、~」とあるだけで主語がないの物かなしくて帰りまうで来て~」とあるだけで主語がないので解し難い。せっかく訪ねて来た業平が「つれづれとして」いるはずはないから、「つれづれとして」とあるだけで主語がないので解し難い。せっかく訪ねて来た業平が「つれづれといともない。

九七六年)と指摘されている。また、新全集『古今和歌集』の口すべきである。」(竹岡正夫著『古今和歌集全評釈』右文書院・一とでもあれば親王の様子になるが、このままでは業平の主観と解しかし、竹岡正夫氏は、「「ものかなしくて」は「物悲しげにて」しかし、竹岡正夫氏は、「「ものかなしくて」は「物悲しげにて」(片桐洋一著『古今和歌集全評釈』講談社・一九九八年)

語訳も「親王は所在ないご様子だったので、私はなんとなく大変

談したのに、今はどうしようもないのである。痛恨の極みとはこ(7)片桐洋一氏は「第八十二段や第八十三段前半では夜を徹して歓(6)竹岡正夫著『伊勢物語全評釈』右文書院・一九八七年(5)前掲(4)片桐洋一著『古今和歌集全評釈』参照。ているものの、「ものかなし」いのは業平であると解釈している。悲しくて」とあり、「つれづれとして」の主体は親王であるとし悲しくて」とあり、「つれづれとして」の主体は親王であるとし

(片桐洋一編『鑑賞日本古典文学》伊勢物語・大和物語』角川書(片桐洋一編『鑑賞日本古典文学》伊勢物語・大和物語』角川書いるのである。」と、泣く男の姿に触れられてはいるものの、泣のものが移ろいゆくのを見る悲しみがこの一首において爆発してたよと泣くのである。泣きながら帰るのである。(中略)すべてれをいうのであろう。こんなこと「思ひきや」、思いもしなかっれをいうのであろう。こんなこと「思ひきや」、思いもしなかっ

店・一九七五年)二〇六、二〇七頁。

(8)前掲(7)一六四頁

(前掲(7)一六五頁)と、六九段が本稿に引用した贈答歌で終「かち人の……」の連歌を中心とする場面はなかったと思う。」勢物語』は『古今集』と同様に、この贈答で終わっていて、後の(9)片桐洋一氏は「大胆な推定、大胆な解釈だが、原初形態の『伊

く」に収斂していく語りをしていることが確認できる用例となろ場面の閉じ目ではなく、段末に置かれることとなり、物語が「泣わることを推測されている。それならば、六十九段の「泣く」は

七九年一月)(10)六段は、『伊勢物語・恋と死」(『国文学』二四―一・一九(11)今西祐一郎氏「伊勢物語・恋と死」(『国文学』二四―一・一九勢物語』の物語部分の作られ方を端的に示していると考えられる。(実際はこの部分も虚構であるのだが)を挙げることにより、『伊(10)六段は、『伊勢物語』自身が、補注という形式で現実の出来事

ら。勢物語』自身の種明かしであるという考え方が現在では有力であ勢物語』自身の種明かしであるといたが、この部分はいわば『伊のの筆による注だと考えられていたが、この部分はいわば『伊勢物語す子問』の「後人の筆」や、(12)六段末尾の解説部分は、『伊勢物語童子問』の「後人の筆」や、

王の現状を指すと解する。 政治的背景を重ねて読みとく結果であるので、本稿では単なる親情を忘れては、と解するものもあるが、八十三段後半部の解釈に(13)「忘れては」の解釈に、親王がこのようになった成り行き・事

構成は『伊勢物語』独自のものであると言える。 懐旧に根ざした和歌と、それに付随する泣く姿へと収束する物語『伊勢物語』のように和歌に付随した姿ではない。この点からも、いるが、これは波線部で示したように悲しみによる姿であり、『希約4年との夕巻の牙景に「公見に「泣く泣く」と渡しく泣して著約4年との夕巻の牙景に「公見に「泣く泣く」と渡しく泣して

(きのした・みか《本学大学院博士後期課程)

(15)前掲(7)二〇四頁。